# 京大・神大インゼミ報告

文責：偸伽 篤志

1999.12.4、いつもゼミを行っていた大学内の演習室で、私たち京都大学岩本ゼミは神戸大学藤田ゼミとのインターゼミナールを行いました。形式としてはディベートではなく勉強会というかたちをとりましたが、勉強会であっても、お互いのゼミにとって本当にためになる、そして結果的には（？）大成功のインゼミになった思います。共通のテーマは、『アジア通貨危機について』でした。

……‘結果的’にと書いたのは、そこへ至るまでに我々岩本ゼミ神大班が右往左往することになったからです。問題は、京大側のテーマがなかなか決まらないことでした。

## テーマ決定に至るまで

今回神大とのインゼミをするにあたって、一番難航したのがテーマ設定についてでした。最初に「アジア通貨危機についての勉強をしよう！」ということは両者で合意したのですが、ではその先の細かい設定についてどうするのかということがなかなか決まらなかったのです。

私個人としましては、先生ご推薦の吉冨勝氏の著書「日本経済の真実」を用いて、今回のアジア危機は従来型経常収支危機とは違った資本収支危機であるとすること（詳しくは後述します。）の説明と、それへの対応策のあり方について発表するつもりだったのですが、神大班某Ｓ君の「そんなの誰もが言ってることでつまんないじゃん。」の一言でこの案はボツになりました。では何がしたいのかと問うと、「資本移動規制にしぼって勉強をしたほうがいいのでは？」とのこと。みなの意見を聞かずに独断先行になってはいけないと思いつつ、なんとか資本収支危機の考え方も発表に織り交ぜたかったので、『今回の危機は資本収支危機だった→ではそれを乗りきるための資本移動規制は望ましいのか？』というテーマでいこうと決めたのでした。（この段階では、あとあと大変なことになるとは、予想だにしなかった……。）

ここで一番マズかったのが、神大と連絡をとる回数が少なかったこと、そして意志疎通をほとんど取っていなかったという事です。こちらが資本移動規制についての資料を集め始め、レジュメをつくりだそうと思った矢先の（インゼミの一週間ちょっと前なんですが…）、神大との電話連絡のやりとりを以下に述べますと……。

京大「一時的に短期の資本移動規制をすることは、それはそれで一定の効果をあげるのではないでしょうか？」
神大「そうだと思います。」
京大「でも資本移動規制って長期でやってしまうとと、コストがかかってよくないですよね。（これがうちの主張でした。）」
神大「うちもそう思います。」
京大「……（なんか同じような内容だなぁ、と思いつつ）規制っていっても、流入規制、流出規制という二つの方法がありますけど、チリの例を挙げてみて流入規制のほうがいいのではないか、という方向に持っていこうと思っるんですが…。」
神大「うちもそういう感じで進めてますよ！」
京大「……（やばい！ほとんど一緒やん！）うっ、うちとしましては、今回の危機の原因についても発表に織り交ぜていくつもりですけど……。」
神大「うちもそれについては触れてますよ。」

なんということか……。発表しようとする内容がお互いほとんど一緒で、神大側はもうレジュメも完成に近いという……。一方、私たちの方はまだ資料の整理しかできておらず、これからレジュメ作りに取りかかろうとしていたところで（まだまったく清書できていなかった。）、またすでに神大側のレジュメができあがりつつあるということも考慮に入れて、しかたなくこちらが発表内容を変更することになりました。

しかし内容を変更しようにも、神大の発表しようとする内容はが今回のアジア危機についてのあらゆることを網羅していたので、（これじゃあうちが発表する内容がないよう！）などとくだらないダジャレを言っている暇もなく、もういちど神大と連絡を取り、危機の経緯と『最後の貸し手』のありかたについてはうちが詳しく発表するつもりだということを伝えたところ、神大も納得してくれました。『神大：資本移動規制、京大：最後の貸し手』というように両者の報告内容にはっきりした違いが見い出せて、この時点でようやくテーマが決定したのです。（この時すでに三日前くらいでした……。）

難産の末に生まれた報告ですが、内容自体は藤田先生、岩本先生、両先生にほめていただくなど、とてもいい出来にしあがったと思われます。

以下、双方の発表内容を簡潔に述べたいと思います。

## 神大側の主張

1990年代になって、タイ、インドネシア、韓国、マレーシアといった東アジアの国々への資本流入の形態が、それまでの直接投資中心の資本流入から、株式投資などの短期資本中心の流入へと変わっていった。それが急激に流出したことが今回の危機の原因であるとする。

では資本移動は規制すべきなのか。仮に規制をかけて流入を抑制したとすれば、それは健全な長期資本の流入減少にもつながるなどの問題点があるので、長期的に規制をかけていくのは現時点では困難である。しかし、金融システムの整備などの際に、一時的なものとして用いるのであれば一定の効果はあげられよう。そこで、基本的な路線として、慎重かつ漸次的な資本移動の自由化を推進していくだと考える。その際に、自国がどのような為替制度をとればよいかといったことを考慮に入れつつ、自国の金融システムにおけるプルーデンシャル規制の適用と経営の健全化などを慎重に進めていかなければならない。

## 京大側の主張

### 1．アジア危機を資本収支危機と捉えて

今回のアジアにおける危機は、過去の中南米通貨危機の時と違って危機に陥ったアジア各国におけるファンダメンタルズに悪い点は見られなかったことから、従来型の『経常収支危機』ではなかったと考えられる。そこで近年の資本移動の自由化にともなう、大規模な資本移動、とりわけ資本の流出に今回の危機の原因を求めたのが『資本収支危機説』である。つまり、大量に、かつ短期資本という形で入ってきた海外資本がアジアの市場から急激に流出したこと、それにともないドルペッグ制をとっていたアジア各国が固定レートを維持できなくなったことが直接の原因であったとするものだ。

これに従えば、『経常収支危機』に対応したものである IMF のとった引き締め政策は、今回の危機に有効であったは言えない。実際、IMF コンディショナリティーを受け入れた国々では景気が冷え込み、企業収益の悪化と債務返済のいっそうの困難化が見られた。
また、IMF の融資資金そのものが今回のような危機に対応できるほど大きくなく、今後同じような危機が起こったとしたら、危機に陥った国からの要求額に対応しきれなくなる可能性もある。

ここにいたって、現在の IMF の限界が指摘できる。そこで我々岩本ゼミは、国際システムにおける『最後の貸し手』に注目したわけである。

## 2．最後の貸し手と IMF

現在の国際システムにおける『最後の貸し手』(Lender of Last Resort…以下 LLR とする。)とは一般的に IMF や世銀であると考えられている。そこで我々は LLR としての IMF の可能性を探っていった。

LLR には
①Crisis Lender（危機に際して流動性を供与する役割）
②Crisis Manager(危機の原因追及とそれへの対応をする役割)
という二つの役割がある。

我々は、現状において IMF がその機能を担いうると考えた。というのも、IMF は上記の二つの機能を果たしうるからである。
①Lender として……加盟国の資金プールを利用
②Manager として……加盟国間の交渉をリードしたり、融資パッケージの策定に協力

とはいえ、危機への対応や、融資枠が慢性的に不足していることについての批判が出ているが、それは今後の対応策の柔軟化と融資額の拡充によって、解消されるであろう。そのための試みは CCL（新たな融資制度）の導入や、GAB（一般借り入れ取り決め）や NAB（新規借り入れ取り決め）の創設といった形で現在進められている。

さらに、IMF が地域的な経済グループと連携して危機に対応していけるような国際通貨体制を築くことも必要と考えられる。今回のインゼミでは、その例として新宮沢構想と AMF 構想を取り上げた。

今後IMFは、将来的に設立される可能性のある地域的な枠組みとの協調性を維持しつつ、また危機が起こった国に対しては、国際通貨システムにおける「最後の貸し手」として十分な融資と適切なコンディショナリティーを課すことにより、国際通貨システムの安定化を図っていく必要があるというのが、我々の結論である。

## インゼミを終えて

先に述べた様に、今回の神大班のインゼミは、テーマ設定が遅かったがゆえに遅々として作業が進まず、神大班ならびに同回生のゼミの友人たちには本当に迷惑をおかけしました。特に最後の最後までぼくたちの面倒を見てくださった藤嶋さんと清谷さんには感謝してもしきれないほどです。「最後の貸し手」についての英文を、自分たちが担当したインゼミを終えたばかりで疲れているはずなのに、徹夜までして一緒に訳してくれたみんな、それをまとめてくれた清谷さん。新宮沢構想について、またレジュメの組み立て方について一緒に考えてくださった藤嶋さん。そして当日、質疑応答で協力してくれた神大班二回生の米崎君、秋山さん、常に叱咤激励をしてくれた関根君。なにより、担当のインゼミが終わった後の飲み会を切り上げてまでわざわざ差し入れを持って来てくれ、そして励ましてくれた同回生のみんな。本当にありがとう。その結果があの立派なレジュメであり、また当日の発表がうまくいったことでした。個人的なことを書いて申し訳ないのですが、正直言って、みんながいてくれたからこそ僕はがんばれたのだと思います。

次期インゼミを担当する新三回生のみなさんに言いたいのは、(前々から言われていることですが、) やはりインゼミにあたっては、双方の連絡を密に、そして意志疎通をしっかりはかることが大事だということです。過去のインゼミ報告を読んでも、同じように互いの意志疎通の重要性が述べられているのですが、今回のインゼミ活動でもそれがうまくいかず、改めてその必要性を感じました。それから、ゼミ生同士の輪を大切にしましょう。助けたり助けられたりして、ゼミ生同士の信頼関係が築かれていくものです。特にインゼミに関しては、みんなの協力があるのとないのとでは、作業的にも、そして心理的にもずいぶん違ってくるはずです。こういったことを忘れないで、インゼミに臨んでもらいたいものです。

本年度の岩本ゼミには、また何人もの精鋭たちが入ってくるとのこと。すでに伝統ともなった秋のインゼミを、よりすばらしいものにしてもらいたいと心より願うばかりです。